

グローバルアジア研究科開設記念シンポジウム

共生と発展—21世紀アジアが目指すパラダイム

日程：2006年7月16日（土）

主催：国士舘大学大学院グローバルアジア研究科・

国士舘大学アジア・日本研究センター

場所：国士舘大学鶴川校舎 30号館 101教室

梶原景昭（国士舘大学大学院グローバルアジア研究科 委員長）

「開催趣旨」

グローバル化の進行は、世界をひとつにして平和をもたらすとお思いになるかもしれませんが、じつは世界が広がっていくと対立や紛争が起こりやすくなります。それは最近の東アジアにおける、日本と中国、韓国との関係のみでも明らかです。また、グローバル化により、言葉や宗教における対立が減っているように思われるかもしれませんが、現実には宗教の違いをめぐる対立はむしろひどくなったといえます。その上で私たちは二つの矛盾した状況の調和をどう取るかを考えなくてははいけません。確固とした自分自身を持ちたい、しかし同時に地球社会の一員として自分勝手に生きることは許されないのです。難しい状況です。アジアの様々な社会にとって重要な経済発展も、それをうまく運営する以上の問題が待ち受けているような気がします。さらに共生を目指した、他者の理解や他の社会との付き合いは、文化を理解するという領域に留まることと感じられるかもしれませんが、現在ビジネスにしても政治にしても、また単なる旅行にしても、他者への理解が必要でない領域はありません。こうした問題に、我々は注意を払わなければならない。グローバルアジア研究科もそういったことを研究科のテーマの一つとして掲げる大学院であります。

本日はキルギス共和国からイシェングル・ボルジュロフ先生をお招きいたしました。先生は、キルギスおよびロシアで政治学を勉強された政治学者であります。キルギスにある二つの大学で学長を、またキルギス教育大臣、文化大臣、更に副首相を二度お勤めになりました。ですから、学問の世界でも行政・政治の世界でもご活躍なされている方です。現在キルギス屈指の知識人といっても過言ではないと思います。

もうひとりの基調講演者、黒川紀章氏は、本日は体調を崩されて、ビデオ出演というかたちで講演してくださいませ。黒川先生は本日のテーマ、特に共生についてはここ30年くらい評論活動その他で執筆および講演を多くされてきました。世界的に活躍されている有名な建築家でいらっしゃいます。

本日の国際シンポジウムは、大学院のグローバルアジア研究科、同じく大学院の協力機関である、国士舘大学アジア・日本研究センターとの共催において、開催いたしております。

イシェングル・ボルジュロフ（キルギス共和国、政治学者）

「グローバル化と共生——中央アジアからの視点」

本日はご招待いただきましてありがとうございます。私は、現在の中央アジアについてお話いたし

たいと思います。中央アジアには、地図でご覧になれるように、様々な国が混在し、世界的にも非常に重要な地域といえると思います。ソ連時代に比べ、こんにちこの地域は、東と西、北と南を繋ぐ大切な役割をもつようになりました。

中央アジアは18世紀から19世紀において、ロシアとその管理の下にありましたが、ソ連崩壊後、他の大国の関心も得てきています。ここで中央アジアに対して、ロシアや中国、アメリカ、ヨーロッパ、アラブ諸国がどのような影響を及ぼしているかについて、お話ししたいと思います。

中央アジアには、いまだにロシアの強い影響が及んでいます。それは現在もロシア語が非常に多く使われていることから分かります。またロシアは政治的・経済的に重要なパートナーです。一時期ウズベキスタンはアメリカと緊密なパートナーシップを築こうとしましたが、2005年にアンディジャンという都市で、多数の市民が軍によって殺害されるという悲劇が起こった後、アメリカはウズベキスタンは民主主義国家でなく、市民には自由がないと批判的な態度をとるようになりました。これによりウズベキスタンはロシアを戦略的パートナーとして再び選びました。キルギスでは、2005年に政権交代が起こり、それ以後、ロシアとカザフスタンが最も重要な戦略的パートナーになりました。

新しい世界地図の中では、中国が中央アジアに新たな影響力をもつようになりました。中国にとっては政治や経済の他に、イスラーム原理主義との戦い、ウイグルやチベットにおける紛争、また中央アジアの国々との防衛関係を保つことが非常に重要になっております。1992年に中国は中央アジア諸国と外交関係を結び、その後は特に友好関係を強くしていきたいという意向を明確にしてきました。また中央アジアとはより近い関係で貿易経済を発展させたいと願っています。1996～7年には新シルクロードを構築し、カザフスタンに通じる道が開かれました。シベリア鉄道とも繋がるそれはヨーロッパとアジアをつなぐ交流の要であります。こういったことによって経済や貿易分野におけるロシアの重要性が縮小しています。現在の中国が展開する現実主義的な政策を見てみますと、指導部がどのような方向性を描いているのかが、今後注目すべき点だと思います。

他にはアメリカが中央アジアをコントロールしたいと名乗りをあげています。大国アメリカはグローバルイニシアチブにおいて、安全保障のリーダーシップを取るべく行動しています。アメリカの一部メディアは、中央アジアこそが地球全体の政治を動かしていく支点にあたり、東西また南北を結ぶかけはしだとして考えているようです。9.11以降、アメリカの中央アジアにおけるプレゼンスは顕著になってきました。それまでは世界の僻地であったところが、中心地として考えられるようになったのです。最近では対中央アジア政策も変化を見せ、当初は民主主義や市場経済といったような価値をこの地域に根付かせていこうとしておりましたが、90年代からはエネルギーや石油の基地としての政策が推進されています。このようにアメリカは、中央アジアに対して政治的にも経済的にも影響を強めていく傾向が強くなってきております。

次にあげられるのはアラブ諸国です。中央アジア諸国はもともとイスラーム教国であり、現在はこれまでの2～300年の間には見られなかったような密接な関係にあります。それはたとえば中央アジアの人々がメッカに巡礼に行くことや、イスラーム開発銀行が中央アジアに積極的に進出してきていることから分かります。

ヨーロッパ諸国は、2000年になって中央アジアに対して積極的な資金援助政策を展開するようになってきました。日本は外務大臣のイニシアチブによって、2003年あたりから中央アジアに関心を示し始めました。国士舘大学では、中央アジア各国の学生が学部と大学院で研究をされているようで、大

変嬉しく感じます。ここで学んでいる人たちが将来、文化、教育、外交部門において、日本との架け橋となってくれることを心から期待しております。そしてこの中央アジアに対して関心を示して下さっている 21 世紀アジア学部の皆様本当に感謝を申し上げたいと思います。

現在、中央アジア諸国が抱えている問題には民族的、地域的な安全保障の崩壊があり、また従来型、非従来型の脅威があります。中央アジアでは、国家安全の脅威というのは、難しい現在の局面と、中央政府や国家経済がもたらす困難によって起きているものです。この脅威を少し分析しましょう。

まず、政治情勢ですが、弱く不安定な民主的制度、憲法の理念と現実の政治との乖離、権力機関と反体制との対立、法律違反、政治紛争の種となる社会勢力の多極化、国家権力制度を社会からコントロールするメカニズムの欠如、そして民族的及び階級的な分離主義の高まり、さらに財閥、種族間の権力闘争とそれに絡む犯罪など、さまざまな要因による脅威が生じています。また、経済的な面では、長引く経済不況、進まない経済改革、それから製造業の生産縮小、燃料や原料への偏った依存、また低い国際的な競争力、農業部門の弱さなどの問題が挙げられます。また社会的には、経済格差の拡大、社会的な安定要因となる中流層形成の遅れ、汚職や犯罪、そしてまた医療や感染症などの問題があげられます。教育の質も低下していて、ソ連時代は 100%であった識字率も下がり、科学技術ポテンシャルも低下し、頭脳流出が続き、そして基礎研究が衰退しています。また工業的には人為的な被害や事故が頻発してきており、使用済みウランの保管問題なども挙げられます。

こうした脅威を前にして、今中央アジア諸国は選択を迫られております。この地域は紛争が頻発しうる火種となる危険を持っております。各国の社会的、経済的、政治的な発展レベルが異なっているからです。最も民主化が進んでいるのは、市民セクターが発達し、言論、集会の自由が高いレベルで保障されているキルギスです。一方、最も独裁的な体制が維持されているのはトルクメニスタンです。またウズベキスタンも、2005 年の事件のあとは独裁的な色合いが濃くなってきております。カザフスタンにつきましても、コントロール可能な民衆国家という方程式、指導者が水を水門でコントロールしながら、様々な形の自由を管理しながら国民に与えていくという考え方が当てはまるのではないかと思います。カザフスタンは、現在経済改革を積極的に行っており、2030 年までに最も経済が発展した 50 カ国の中に入ろうという大きな目標を抱いております。それにはまず経済改革、その後に民主化があると考えているようです。

次に、中央アジアに内在する問題を取り上げていきたいと思っております。中央アジア諸国の中でも歴史的に続いている複雑な関係は、タジキスタンとウズベキスタンです。1922 年にソ連内において中央アジアの国境が作られたとき、それぞれの国に他国の飛び地があるという状況が生まれました。また水の問題も深刻で、中央アジアの飲料水のうち、90%はタジキスタンとキルギスでとれます。ですから将来、水の問題が深刻化したら、その際はキルギスとタジキスタンが主導権を握ることになります。他には、石油産油国の利権がぶつかるカスピ海沿岸、それからウズベキスタンとキルギスの境にあるフェルガナ盆地があります。ここは非常に人口密度が高く、肥沃な土地で、同時に紛争が広がる可能性を孕んでいるのです。このように中央アジアというのは、社会的、政治的、政策的に非常に厳しい現実を突きつけられています。

一方では、中央アジアは社会的、政治的、経済的にグローバル化の影響を受けています。他方では、それぞれの民族の独自性や伝統、アイデンティティを守ろうとしております。私自身は、中央アジアの民主的な価値が発展していき、ヨーロッパとアジアを結ぶ重要な地域になると思っております。中央ア

アジアは、文化のレベルも教育レベルも高く、天然資源も豊かです。したがって将来は明るいと考えているのです。

どうもご清聴ありがとうございました。

黒川紀章（建築家）

「共生のパラダイムとアジアの未来」

私が 1960 年に提唱し、これまで主張してきた『共生の思想』は、おかげさまで世界中で翻訳され、読まれるようになりました。今日はその中でもアジアについて私の考えをお話します。

私は 1960 年代以降、時代が大きく変わってきたと感じております。20 世紀前半というのは、世界の、とくにヨーロッパにおいて近代化が急進した時代です。それを支える様々な思想や新しい動きが台頭してきました。工業化を目指した近代社会、政治、そして科学技術発展による経済の発展などです。経済を発展させるには、世界共通の普遍的な考え方がなくてはならない。それが 1960 年代くらいまでの傾向です。

しかし、1960 年代以降、それは急変しつつあると思うのです。工業化社会を目指す近代化から、それに加えて情報化社会を目指す、新しい時代になっているのです。また、知、哲学のベースや学問といったところにも変化があります。それは新しい生命の時代であり、その中心となるのは共生の思想だろうと考えています。私は名古屋から京都大学に進み、建築物を見て京都の町を歩いたのですが、日本の歴史、日本の文化を知らなければと感じました。そこで思い当たったのが、学校時代に恩師から学んだ「ともいき」という考え方です。

私は 10 歳で戦争を体験しました。教科書を黒く塗りつぶした時に感じたのは、それまで勉強した歴史や文化は、それほど絶対のものではなかったということです。世界を考えたとき、哲学、学問の体系、技術経済の中心はヨーロッパにあり、それは大変貴重なものですが、それとは別にアジアの思想体系として「共生」を考えついたのです。

ヨーロッパが一番優れていて、それに近づこうというのが、明治以降の時代の風潮でした。これが世界中に広がることによって同じ価値観が拡がり、普遍的なものとなったのです。しかし、今我々が注目しているのは、ヨーロッパもアメリカもイスラームもアジアも素晴らしい、それぞれ素晴らしい文化を持っている。こういう異なる文化をもって共生するのがもっと豊かな社会、共生する世界、という考え方です。

それを目指して私はいろいろなプロジェクトを展開してきました。たとえば、マレーシアでは新しい空港を計画しました。プランの特徴は二つのターミナルの間に熱帯雨林を再生したことです。また、イスラームの文化やマレーシアのこころを、ただ模倣するだけでなく、抽象的に再現しました。依頼されたとき、マハティール元首相が、グローバルでモダンな空港を作り、そのなかでマレーシアとイスラームの文化を表現してもらいたいと話されました。これは、グローバリズムとローカリズムの共生です。共生思想というテーマですね。

また、中国の南にある昆明というところで空港都市をデザインしました。産業を盛り込んで物流の拠点をつくるのです。そしてベトナム、タイ、マレーシアを通過してシンガポールへと、東南アジアから中国を結ぶ新しい物流のラインを促進するプロジェクトを進めています。

さらには、カザフスタンの首都計画に呼んでもらいました。アフガニスタンのテロ行為が少しずつカザフスタンに浸透しているのです、更に安全なところに移動しようということになり、安全保障も考えて新都市を求めたのではないのでしょうか。計画の際には、中心に流れる川と共生する街にしようと思いました。中央アジアが注目されるきっかけとなったかひとつに、カザフスタンでの石油発見があります。将来はサウジアラビアに次ぐ石油大国になるかもしれない。そのためのプロジェクトとして、カザフスタンからカスピ海を横断して、アゼルバイジャン、トルコを経て地中海へと繋ぐパイプラインを作ろうというものがあります。そうしてカザフスタンの石油資源や中央アジアの様々な資源を直接供給できるということになりますと、中央アジアが世界に対して持つ影響力というのは大きくなりますね。

お話したように、私は主にアジアの国々で 21 世紀に向けた積極的な新しい街づくり、新しい国づくりに携わっています。それは素晴らしい取り組みだと思っております。私の共生の思想でいえば、ヨーロッパもアメリカも素晴らしい。アジアにも 21 世紀に向けて大きなものがあると思います。私は以前から、地球の文明は時計回りに進んでいるという説を持っておりました。ヨーロッパの地中海から大西洋に出て、アメリカ大陸を横断し、環太平洋を経てアジアにやってきたのです。中国は今、発展しています。その勢いで中央アジアの時代がくる。そしてロシアが発展し、もう一度それが拡大されて、そういうふうに世界が関連しあいながら発展していくのだと考えています。

アジアから発信した共生の思想という知恵には、自然との共生という以上に、貴重な環境を大切にするという考え方があります。それはヨーロッパの近代化ではうまくできなかった。けれどもアジアの知恵を通じて、水と自然と人間が作ったものを共生させて、アジアの、アメリカの、世界の国々がそれぞれの文化の特徴を生かしながら、共生を感じられる時代を迎える。それが 1960 年代以前と比べたらもっとも進んだところでは。

世界の思想は、「共生」だけでなく、他にも大きな変化がありました。二元論から現象学、そして今、哲学の最前線はポスト構造主義という新しい段階を向かえています。ダーウィンの進化論が中心であった学問の世界も、新たな、生命の時代の学問体系になっています。それはたとえば、精神と物質の間を論じた学問などの、新しい哲学としてのポスト構造主義です。これからもアジアから生まれた「共生」の思想が世界中に広がっていくことと思います。